

## ◆巻頭言◆

### アウトカム経済の時代 その6

### スピリッツを持ち始めたモノ、スマートデバイス

日本ナレッジ・マネジメント学会専務理事 山崎 秀夫

アウトカム経済の基本は何と言ってもセオドア・レビットが提唱したモノ作りの「モノからサービスへの移行」である。

そしてその本質はハードウェアの開発の上に成り立つソフトウェア作りにある。これはありとあらゆるモノの中にパソコンが入り込むと言った見方もできるし、逆にモノがコンピューターに手足が生えたモノに変化し始めたと見るともできる。その結果、所謂、操作性、ユーザーインターフェイスが劇的に変化し始めている。ムーアの法則に基づく生産性の向上により、音声処理やモーションキャプチャー処理が劇的に発展し、モノがしゃべるなど会話を理解し、人の視線や動作を理解するようになった。

そうなればモノの世界観も変化する。フランスの科学人類学者ブルーノ・ラトウールは「モノと人とのハイブリッド・ネットワーク」を提唱している。彼の世界観は一言で言えば「モノがスピリッツを持ち、生き物として人に立ち向かう」と言う点にある。

アウトカム経済が進めばまるで中世のお伽噺のように「机や椅子、森の木々やしゃべりだす」ように「レビも車もメガネも人と会話する」代が訪れる。実際、既にスマートデバイス版のバービー人形は話し出している。

第四次産業革命により産業社会が新しい発展段階に入り始める中、ICTを中心とする科学の発展が「神話的世界を復活する」と言う面白い現象が起き始めている。

科学的発想は人類の歴史の中でギリシャローマに始まる高々4000年の歴史でしかない。一方精霊信仰や音楽、踊りなどは、ホモサピエンスの存在以前からの進化のたまものとされている。

進化心理学は自然淘汰の中での人の自然な発想として非科学的な神話的な物語発想を作り上げたと見ているようだ。そして論理的思考は、読み書きのモジュールと同様、人類の脳の中にはモジュールとして存在しない、他の心的モジュールの応用でしかないと考えて

いる。

アウトカム経済の下では科学の発展がモノの神話を復活する。正にアニメの「新世紀エヴァンゲリオン」の言うとおりの「エバに乗った少年は神話になる」のである。